

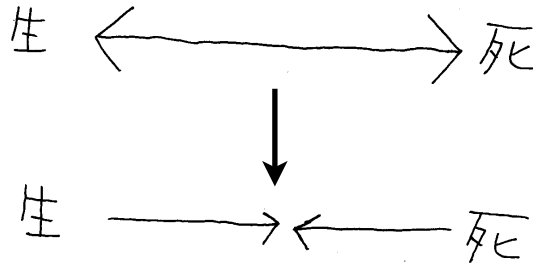
遺場所



懸田優太
建築設計研究室

1 はじめに

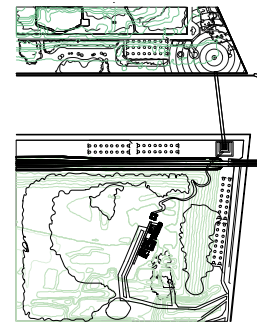
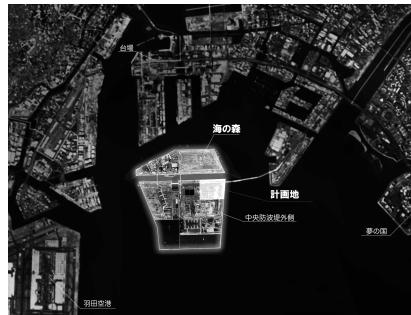
東京23区の火葬場は全国的に見ても10万人あたりの火葬炉が1.24基と少なく、また公営斎場2カ所、民間斎場7カ所と極めて高い民間依存率であるため、公営の火葬場の建設が必要である。さらに、深刻な墓地不足に悩まされており、都内霊園の倍率は20～50倍と珍しくない。そして現在では2万基のそして20年後には3万基の墓地が不足するだろうと考えられている。そこで私は火葬場、墓地不足問題といった問題を解決し、東京都民の為の公営斎場と生と死を近づけるようなイバシヨを提案します。



現在、生きている人は死を遠ざけて考えないようにしている。
それを近づける事で死を考えるきっかけを与える。

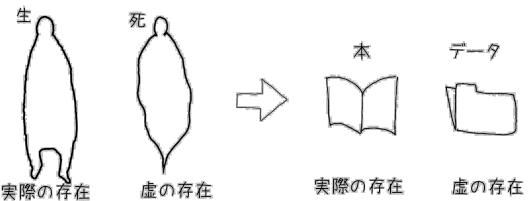
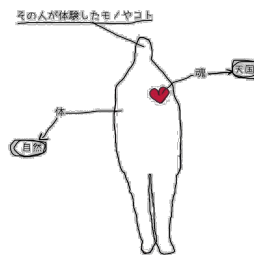
2 敷地

敷地は現在も埋め立てが行われている中央防波堤外側埋め立て地その2、この場所はまだ住所もなく用途も決まっておらず、大規模の敷地を確保できるという事で霊園にぴったりだと考え、ここに敷地を設定する。
そして中央防波堤内側では、安藤忠雄による『海の森プロジェクト』が進行中であり将来は緑豊かな場所になると考えられる。



3 コンセプト

人は死がある事で人生や時間を考える。
生と死はコントラストのようなもの、死を身近に捉えていれば『今生きている事がより鮮明に感じられる。反対に遠ざけてしまえば命の輪郭もぼやけてくる。』
人はいずれ死ぬ、体は自然へ魂は天国へ行く。
しかし、その人が経験したモノやコト、記憶はどこへ行くのか？それを建築に残す



本は虚の存在に仮の実体を与える
墓という媒体では他者とのつながりは望めないが本という媒体においては他者とのつながりを持つ事が出来る

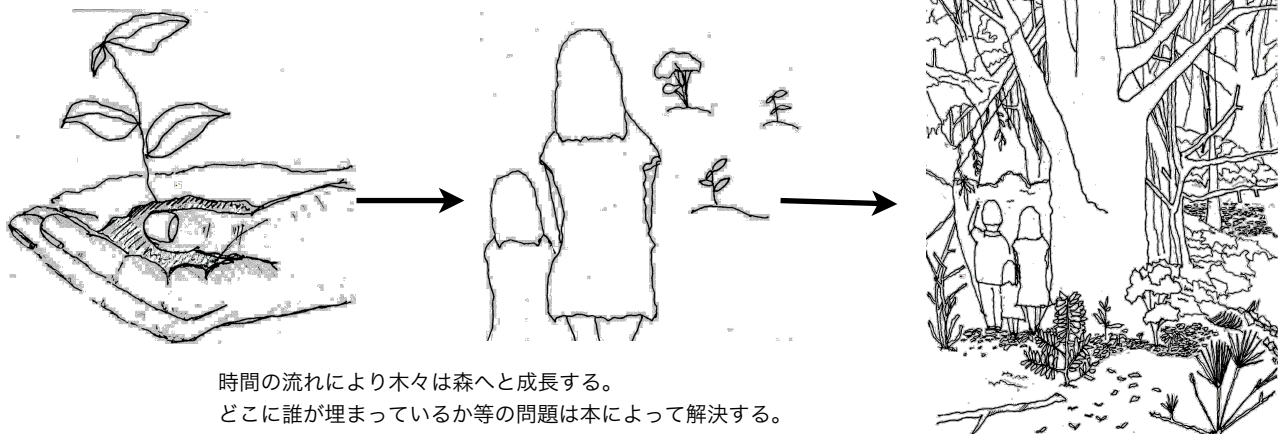
4 プログラム

用途は、樹木葬型の墓地、人生のアーカイブとしての図書館と通常の本をデータ化したモノを集める電子図書館そして公営の斎場である。



人は死ぬと木と本になる。時間の流れにより木は増え成長し森へ、本は密度を増し、積層していく。

目に見える時間の流れは負の時間しか持たない敷地に新しい歴史をもたらす。

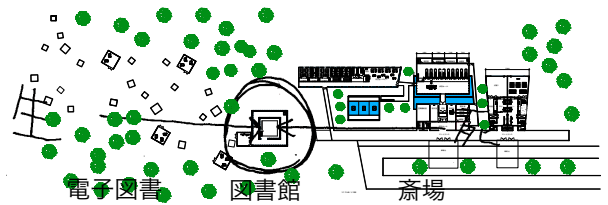


時間の流れにより木々は森へと成長する。
どこに誰が埋まっているか等の問題は本によって解決する。



従来の火葬場には大きな煙突がありましたが、人々はその煙突や煙を拒みました。
技術の進歩により煙突が火葬場からなくなり、人々は死を連想しなくなりました。しかし、そこで失われた『死を憶う』事こそ人が生きるうえで大切な事ではないでしょうか？

時間軸

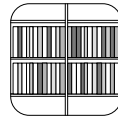


5 デザイン

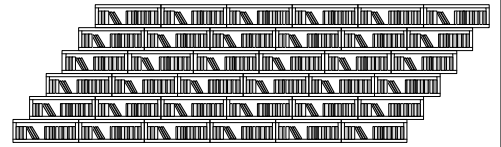
時代の変化により建築も変化します。
火葬場からは煙突が消え、今度は図書館からは本棚が消えるかもしれません。
その建築を構成する二つのモノの死を掛け合わせ、死を知覚させる煙突は
人生のアーカイブスとしての図書館として人に寄り添い、敷地に存在します



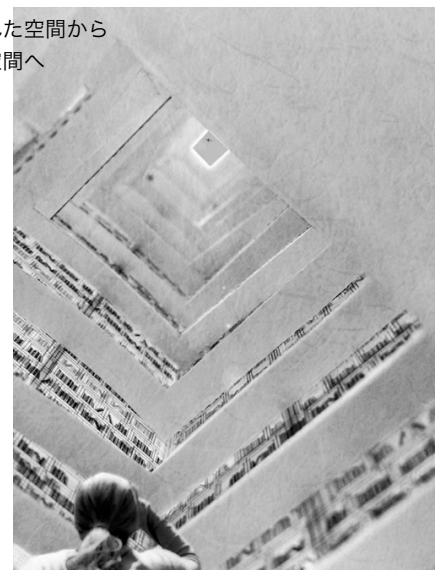
+



=



煙突は煙で満たされた空間から
言葉で満たされた空間へ



敷地は現在、大きな空と広大な原っぱが大部分を占めている、図書館の外では東京では体験できないような空を体験できる。図書館内では大きな空が小さく切り取られ外部とは違う空を体験する。



死者と対話する場所

記憶の蔵書に囲まれて故人が何を思い何を私たちに託そうとしたのかそれを考える為にこの空間は存在する